サンタさんっているのかなあ・・・

童話

今週も2分割にてお届けします。
惜しい作品/全作品講評と順位/受賞発表は
「補足資料」にてお楽しみください。

この街は、ある女の子により、一年中春になりました。
その子は春が大好きで、とてもいいことをしたと思っていました。もう春が続いて半年経ちました。その女の子と、他の女の子が話をしていました。

「ひとつだけ、願い事をするとしたら何がいい？」
「私は夏がきてほしい」。
「なんでよ！春のほうが、暑くないし、気持ちいいわ。お花だってキレイよ！みんな気持ちよさそうだわ。」
「私は夏が好きなのよ。夕焼けが夏の始まり。生暖かい夜に海を見るのが好きだわ。スカッと空が青くて、向日葵が太陽に向かって咲いているのも好き。私は夏になるのを待っているの。」

街を春にした女の子は考えました。（やっぱり私は春が好きだわ！）
春風が吹きました。
この風の向こうに夏は待っている。夏が来るのを待っている女の子もいる。
街を春にした女の子はまた考えました。（・・・・・・・。）

それから一ヵ月後、夕焼けが長くなってきました。
街に、夏がやってきました。

童話と子供

かなり前だが、ある日の新聞に次の記述があった。
ある幼稚園のお遊技会で「さるかに合戦」をすることになった。
物語の内容はご存知の通りカニを騙した悪いサルが最後にみんなから懲らしめられるお話である。
私も幼いころ読んだ有名な童話だ。
しかし、その幼稚園ではサルが懲らしめられるのはイジメにつながると、悪者はひとりもいないように童話の筋を変えてしまったというのだ。
ちょっと待て！
昔から名作と言われている童話には勧善懲悪や、一見残酷と思われる場面の記述がかなり多い。
「スズメのお宿」は欲の深いおばあさんがスズメの舌をハサミでちょんぎったあげく、最後に懲らしめられるのである。
「イナバの白ウサギ」も嘘をついたウサギが皮を剥かれる残酷なストーリーだ。
「浦島太郎」だってカメが苛められる場面が出てくる。
シンデレラも白雪姫も例外ではなく、数えあげたらキリがない。
現在の童話に比べたら昔からの童話のストーリーはかなり辛辣な面があった。
鬼が人を食い、タヌキをタヌキ汁にしてしまうなどの表現は当たり前のように存在したのだから、現在ならとんでもないということになるだろう。
しかし、そのような童話を読んで育った当時の子供が残酷になっただろうか？
いや、現在の子供よりはむしろ情操は豊かだったのではないかと思う。
童話を通じて私は幼い心に「悪いことをしてはいけない」ことを教わり、さまざまな感情を身につけることができたと信じている。
これが本当に分別のある教育者が考えた末のことだろうか？
「さるかに合戦」でサルが懲らしめられたのはなぜか？
どうしてそういう結果になってしまったのか、ということを幼い心にもわかるように教えることができたはずである。
さらに発展させて、どうするのが一番良い方法だったかを考えさせることもできたはずである。
それが教育というものなのではないのだろうか？
しかし、この幼稚園の場合では子供にとって都合の悪いことは教えないということになる。
つまりはクサイものに蓋である。
これは教育の場で教育を放棄する行為に当たるのではないのか？
大人が子供の教育に右往左往してクサイものに蓋をしている間に、子供たちは「見ザル、聞かザル、言わザル」の状態で育つことを余儀なくされてしまった。
その子供たちは今や人間や動物の死もバーチャル感覚にしか受け止められなくなりつつあるようだ。
昨今は現実の死を厳粛に受け止められない現象が青少年の凶悪犯罪の原因とも言われている。
こう考えると、改めてこの国の教育の先行きには不安を感じざるを得ない。

自作童話集　　桃マン

むかしむかし、あるところに小さいがそれは美しい国がありました。その国の王様は本当によい人で、みなが平和に幸せに暮らしていました。しかしそのことを心よく思わない輩がいました。それは隣国の国の王様でした。なにかにつけてはこの国を手に入れようと攻めてくるのでした。

そしてある日、いよいよ攻め落とされそうになってしまいました。心優しい王様はなんとか民だけでも無事に生き延びてくれるよう神に祈りました。するとどういうことでしょう、天から4人のイカツイ男どもがつかわされました。なんと彼らは未来からきた戦士だったのです。彼らの武器は最先端の武器で隣国の敵を次々とけちらしていきました。隣国の敵は槍や弓であるのに対し、彼ら四人の武器はマシンガン、ロケットランチャー、戦車などどれもこの時代に存在しない超強力なものでした。そして長い戦いの末、ついに打ち負かしたのでした。

しかし、この王様は彼らの強大すぎる力を恐れ、四人を封印しようと決めました。そこで王様は国の占い師にどうしたらよいか尋ねました。占い師は城の庭にある一本の木に封印するのがよいと答えました。さっそく王様は戦いの労いと称して彼らを酔わせ、ついに彼らをその木に封印したのでした。その木は桃の木でした。

そして何年か経ち、木には大きな桃がなりました。あるとき、嵐が起こり、一個の大きな桃が飛ばされ、川に乗り大海原にで、とうとうはるか彼方の東方の国に行き着きました。

ある日、桃が東方の国の川を流れていると、川で洗濯しているおばあさんにひろわれました。そのおばあさんが家に帰り桃を切ろうとしたとき、桃はしゃべりました。

「わたしは桃マン。」

めでたしめでたし。

神谷一人のクイズ講義

～童話で始める早押しクイズ

この度は私、神谷一人のクイズ講義にご参加頂き真にありがとうございます。

ところで、みなさんは早押しクイズをしたことがありますか。おそらく、ほとんどの方にそのような経験が無いと思われます。早押しボタンというものに触れられる機会というのはなかなか少なく、我々がお目にかかれるのはテレビ番組くらいのものです。今回はその早押しクイズについての講義です。『童話』というポピュラーなジャンルから早押しクイズを見ていきたいと思います。

まず初めにメーテルリンクの童話「青い鳥」の頻出問題からいきましょう。

問題1）メーテルリンクの童話「青い鳥」の中に＼出てくる幸福の青い鳥を探す兄弟といえばチルチルと誰でしょう？　（答・ミチル）

問題2）童話「青い鳥」の作＼者・メーテルリンクはどこの国の出身の人でしょう？　（答・ベルギー）

問題文中の＼が押すポイントです。皆さん早いと思うかもしれませんが、青い鳥の中に登場する人物でこれ以外の答えがまずあり得ないのです。クイズというものは膨大な知識量を必要とする為に本の内容を薄っぺらくたくさん知っていることが必須です。だから、出題者もそれに見合った問題を出すのです。加えて、クイズプレイヤーはインテリぶるのが好きです。だから、作者名がそのまま出てくることはまずありません。

では、この問題に対する例外を1つ。

例外1）童話「青い鳥」の作者といえばメーテルリンク、漫画「銀河鉄道999」のヒロインの名前といえばメーテルですが、1秒の299 792 458分の1の時間に光が真空中を伝わる距離として定義されているSI基本単位といえば何でしょう？　（答・メートル）

こんな突拍子も無い問題が出ることもありますが、基本は問題文中の「～ですが、」の「が」の次に肝となる文が来るので、それさえ見極めればOKです。

では、次にウィーダの童話「フランダースの犬」から問題を出してみたいと思います。

問題3）童話「フランダースの犬」の主人公・ネロが憧れた画家の名前は何でしょう？　（答・ルーベンス）

実は、「フランダースの犬」の問題はこれ以外に派生しません。作者のウィーダがヨーロッパで人気が出なかったために知名度が低すぎて問題にしても面白くないのです。しかも、愛犬のパトラッシュは有名すぎる上に犬種が「ブーヴィエ・デ・フランドル」という超マイナー犬種でこれも問題になりません。回答者も観客も面白い問題がこれくらいに限られてしまうのです。ちなみに、登場人物が出されることはありません。あくまでクイズは表面上の知識を問うものなので…。

一応今回も例外を出しておきましょう。

例外2）「ネロ」といえば童話「フランダースの犬」の主人公、「暴君ネロ」といえばローマ帝国の皇帝ですが＼、「暴君ハバネロ」というスナック菓子を出しているお菓子メーカーといえばどこでしょう？　（答・東ハト）

この例外2は「語感」を利用した問題です。アナグラムや語感はクイズの定石なので注意が必要です。「暴君ネロ」の「暴君」で首をかしげられれば、「＼」で押すことが可能だと思います。

さて、ここまでみなさんと一緒に早押しクイズの頻出問題を見てきましたが、現在の早押しクイズの本質をわかって頂けましたか。え、わかってない。つまりはこういうことですよ。

『早押しクイズとは知識の探求ではなく、
反射神経と予定調和のみが存在を許される戦場』

これが全てです。しかし、私はみなさんにはそうはなってほしくは無いのです。こんな予定調和が今のクイズ界をダメにするのです。クイズとはこんな堅いものではないのです。だから、みなさんに最後に一言残したい。

「貴方の思考の翼に栄光あれ」

ピノキヲたん

むかしむかし、二十二世紀初頭。ＺＥＰおじいさん（仮名）という腕利きのキャスト職人がいました。機械部品の鋳型を作る職人さんでしたが、受注業務は引退して息子に継いだところでした。

引退したら趣味に生きようと心に決めていたおじいさんは、レジンキャストで人形を作りました。七、八歳くらいの女の子の。服はゴスでロリでフリフリで萌え萌えな感じで。顔は膨らみのある逆三角、髪は黒く腰まで、目の大きさは頭全体の二十八パーセント、等身は五……と、引退する二年ほど前から暖め続けたアイディアを形にしました。

構想二年、製作三日（もちろん不眠）を経て、この等身大フィギュ……じゃなくて人形は完成しました。

「その歳でこの趣味なの？」

……なんと人形が喋ったのです。おじいさんのそのあまりの情熱によって、人形に魂が宿ってしまったのです。

開口一番キツいツッコミによりおじいさんのＨＰは七〇〇〇ほど削られましたが、息子はいても娘はいなかったおじいさんは嬉しさのあまりやーーーと叫びながら、文京区を時速三十キロで走って一周しました。

おじいさんは、この人形に「Ｐたん」と名前を付け、娘として教育しながら余生を過ごすことにしました。

「ま、いいボケ防止にはなるんじゃない？」

とはＰたんの弁。

「心配せんでもまだボケはせんよ」

「むしろ退行してるわね。どうせ夜は一緒に寝ようとか考えてるんでしょ」

トドメの一撃かと思われた瞬間、Ｐたんのペチコートで広がったスカートが少しずつ短くなり始めました。

恐慌状態のＰたんにおじいさんは言いました。

「図星を指すとスカートが短くなる仕様なんじゃ」

……構想二年は伊達じゃありません。

「負けを認めん限り短くなり続ける」

オーバーニーソックスとスカートの間から地肌の脚が覗いています。もう少しで……見えます。

「うっ、うっ……わかったから、もう言わないから、一緒に寝てあげるから許してぇ……」

Ｐたんはスカートを引っ張り、泣きながら許しを乞いました。ツンデレです。いや、ちょっと違うか。

スカートは元に戻りました。

それからだいぶ経ったある日、Ｐたんはおじいさんに連れられ食料の買出しに出かけました。

スーパーに着き、Ｐたんがしばらく歩き回っていると、おじいさんとはぐれていることに気づきました。

Ｐたんはレーダーとマッピングシステムを使っておじいさんを探しました。おじいさんの改良によりなぜかそんなものまで搭載されています。

発信元は千代田区外神田の廃ビル地下。Ｐたんはけっこう歩きました。

そこには眼鏡をかけた男が数人います。おじいさんは彼らに拉致されていました。

「こいつが噂の、喋って動くフィギュ……」

「私は人形よ」

「お嬢ちゃんがこっちに来てくれればおじいさんを解放するよ」

Ｐたんは言うとおりにしました。解放されたおじいさんは出口付近に立って叫びました。

「Ｐたん！ＦＣＳでそやつらをマルチロックじゃ！」

Ｐたんは初めて起動するＦＣＳから武器選択ウィンドウを見ました。

「ナパームキャノンじゃ！」

Ｐたんが右腕ハッチから出た砲身を構えて発射すると、爆風が視界一面を覆いました。

「うわっ、も、萌え、じゃなくってリアル燃え～～」

……こうしてＰたんとおじいさんは男達を倒し、脱出することができました。

おじいさんは自分の「娘」の成長を心から喜び、その先の余生を二人で幸せに暮らしましたとさ。

めでたしめでたし。

シンデレラはポストモダンの夢を見るか？

「童話を例に取ろう。グリムでもイソップでもアンデルセンでも何でもいい。これらの童話では現実に存在するものが現実と違う動きをし、時には現実に存在しないものが存在する。狼は人に扮し、北風と太陽は互いに競い、豆の木は天を突き、人魚は人に化け、魔法使いはカボチャとネズミを馬車に変える。現実世界の人間が創った舞台で、現実世界とは違う法則が存在している。ならばこう考えることが出来るだろう、物語の舞台はこの世界の住人が創造し干渉した『下位世界』であると。物理法則が破綻した世界なんて存在できないだろうって？　物理法則はあくまで我々の世界のものだ。世界の中の法則はその世界の中にのみ適用される。例え我々から見れば矛盾した『設定』ですら、『下位世界』の中では列記とした『法則』となる。『矛盾』と取れる概念が我々のそれとは根本的に異なるためだ。そう、小説（フィクション）は全ての矛盾を許容する。寧ろ小説は矛盾を内包して然るべきなのだ。そして勘のいい者ならここまで述べた理由に気付くだろう。下があるなら上がある。ならば我々の世界にとっての『上位世界』が存在してもおかしくないと。そう、つまり我々は『上位世界』の住人にとってはあくまで登場人物（キャラクター）でしかなく、この世界は彼らの世界から自由な干渉を受けざるを得ない。我々にとって『上位世界』の住人は、言わば全知全能の『神』という存在と同義なのだ。この世界は五分前に全ての情報を与えられた上で突然出現したのかもしれないし、それは三年前なのかもしれないし、もしかしたら次の瞬間にこの世界の全てが消失するかもしれない。ある世界Aの中から創り出された下位世界Bは、世界Aから世界Bに関する情報が全て失われた瞬間に消滅する。上位世界にとって、俯瞰する世界はそれ程に儚いものなのだ。さて、しかしこの階層構造的な世界観はある問題に対する一つの解答と成り得る。——ゲーデルの不完全性定理。『無矛盾である理論体系は、それ自身の無矛盾性を証明できない』。言い換えれば、これは理論から作り出した理論体系は決してそれ自体で完成・完結することが出来ないということであり、つまり我々は科学の最終目標であった、理論的にこの世界の真理に到達することが不可能なのだ。しかし先ほど述べた階層構造的な世界観、もしこれに基づいて『上位世界』の視点——つまり、この世界の理論体系の外の体系からの俯瞰風景（ヒルベルト・プログラム）——を手に入れることが出来たのならば、我々はあくまで理論的にこの世界の理論体系を完結させることが出来るかもしれない。その時こそ、我々はこの世界の真理（TOE）に到達出来るのだ！　……何？　言っている事が無茶苦茶で話にならない？　……ははっ、そうとも！　この疑似科学で超自然的（オカルト）で神秘主義（オカルト）で牽強付会（オカルト）で、何より荒唐無稽（オカルト）なこの矛盾論理（サイコロジカル）を完全に理解するなど、それこそ不可能（オカルト）な話だ！　——しかし、しかしだ。今ここでこの瞬間、この私を上位から俯瞰している存在、『君』は私の論説を知覚して、果たして何を思ったのかな？」

ウサギとカメ　青春編

小学校に上がる前から僕たちは一緒にボールを蹴っていた。
フィールドは公園から学校の校庭へ。
そして今日、全国大会の決勝戦が行われる競技場にいる。

彼には才能があった。恵まれた体と、天性のスピードを持っていた。
エースとして、監督や仲間からも特別視されていた。
与えられた練習は難なくこなせたし、試合でも結果を残せた。
でも向上心はなかった。
出来ることは楽しいから。
そんな理由でサッカーを続けていた。

僕には才能がなかった。人より優れた能力は持久力しか持っていなかった。
練習の鬼として、監督や仲間からも一目置かれていた。
人よりたくさんランニングをして、キックの精度を上げる練習をした。
常にモチベーションは高かった。
試合に出たいから。
そんな理由でサッカーを続けていた。

決勝戦は0対0で後半を迎えた。
緊迫の攻防の中、仲間が相手のファウルで負傷した。
監督は僕に交代を命じた。
僕は慌ただしくピッチに向かった。
フリーキックを蹴るよう指示されたのは
いつも任される彼ではなく、僕だった。
ボールを蹴ってからゴールネットが揺れるまでの記憶は無い。
でも確かに僕はあの試合を決めたのだった。

「ウサギとカメの優勝劇」
代々サッカー部に話し継がれている伝説となった。
でも、みんな、それは誤解だよ。
僕たちは同着1位だ。
カメのゴールはウサギのゴールでもあったから。

くまの むらこ

もりの おくの その また おくに、くまの むらこが すんでいました。むらこは はやく おとなに なりたくて しょうがありませんでした。

そこで むらこは おさるの きっきに ききました。
「おとなに なるには どうしたら いいかなぁ?」
すると きっきは いいました。
「この きを のぼれたら きっと おとなに なれるよ。」
むらこは いっしょうけんめい のぼりました。むらこは とくいになって、もりの ちょうろうの ふくろうさんに いいました。
「ぼく、もう おとなに なったよ!」
すると ふくろうさんは いいました。
「おまえは まだ こどもだよ。」

そこで くまさんは かえるの ケロくんに ききました。
「おとなに なるには どうしたら いいかなぁ?」
すると ケロくんは いいました。
「この いけを むこうぎしまで およげたら おとなに なれるよ。」
むらこは いっしょうけんめい およぎました。むらこは とくいになって、ふくろうさんに いいました。
「ぼく、もう おとなに なったよ!」
すると ふくろうさんは いいました。
「おまえは まだ こどもだよ。」

むらこは なやみました。
「ふくろうさん、おとなに なるには どうしたら いいですか?」
すると ふくろうさんは いいました。
「もりに おおきな おおきな いちばん ながいきの きが あります。その きを たいせつに たいせつに そだてなさい。そのきが はなを さかせるころには きっと おとなに なれるよ。」

むらこは たいせつに たいせつに その きを そだてました。きつつきさんにも あなを あけさせませんでした。

あるひ、あらしがきて、おおあめが ふりました。もりの おがわは あれくるい、どろや きを まきこみ いまにももりを のみこんで しまいそうでした。もりの みんなは、
「たいへんだぁ!もりが、もりが、こわれちゃうよぉ!」
といって、にげまわりました。むらこはおおきな おおきな ながいきの きになんども なんども とっしんして おって たおして かわの はんらんをせきとめました。もりの みんなは、
「ありがとう!むらこ!」
と くちぐちに さけびました。

むらこは ふくろうさんに いいました。
「ぼく、きを たおして しまいました。やっぱり おとなに なれませんでした。」
ふくろうさんは やさしく わらって いいました。
「おまえは もう りっぱな おとなだよ。」

むらこは おおよろこびで ぐっすりねむりました。

改版

「童話ってね、本当は残酷なんだよ。」最近、そんなことを言う人がちらほら居るようです。グリム童話の原典を紐解いてみると、そこには、子供の頃に見知った話からは思いもがけないような事実を見つけることができるからだそうで。

たとえば、『白雪姫』の原典の結末は、真っ赤に焼けた鉄の靴を継母に履かせて死ぬまで踊り続けさせたそうです。どうやら、童話、と言うもののイメージからはかなりかけ離れた原典になっているみたいですね。

さて、でも、何でこんなにかわってしまったのでしょうか。「教育上日本に入ってきたときに変えたんだ」と言う人も居るようですが、実際は、違います。

実は、我々が読み聞かせられたあのグリム童話、これは、グリム童話の原作そのものに基づいています。では、実際グリム童話って何なんでしょうか。これが分からないと話が進みません。

グリム童話とは、文字通り、グリム兄弟が編纂した童話集のことで第7版まで出版されました。そもそも、何でこんな童話集を出そうと決意したのかと言うと、お金儲け…ではなくて、ドイツの民族意識高揚のためだったとされています。当時のドイツは、フランスに占領されていて、フランス軍が好き勝手していたそうです。そんなさなか、「この状況はよくない。みんなで何とか国を立て直そう。」と考えたグリム兄弟は、「古くからドイツに伝わる話をまとめて、みんなに読んでもらって、国民としての誇りを取り戻そう！」なんていうことを考えたそうです。

それで編纂したのがグリム童話初版です。これがよく言われる、原典というやつですね。これらの話が大変に残酷な理由として、フランス軍への反動なんていうものも挙げられるんじゃないでしょうか。他にも、「子どもたちが屠殺ごっこをした話」、など題名だけでもかなり残酷性が強いことが疑われる作品があったようですから。

さて、その後、グリム童話は改訂を重ね、第7版まで改訂が進みました。この第7版が日本に輸入され、グリム童話として浸透したのです。では、この改訂を誰が、何のためにしたのかと言うのが問題になってきます。

驚くなかれ、実はグリム兄弟ご本人様がこれらの改訂をしていったのです。なぜか。実は、フランスの話が結構初版には含まれていたからなんだそうです。そもそも、フランスに対して対抗心を燃やすのが目的だったのに、フランスの話が含まれているとは何事だ。ということで。そんなわけで、フランスの話を削りつつ、この人たちは、削った部分を自分たちで書いていくことにしたのでした。それまでは、伝承どおりに書いていた部分を自分たちで埋めていく作業をするうちに、現在のお話が出来上がったというわけです。

ということで、実は、原典といわれている初版のものも、現在読んでいる第7版のものも、両方とも正規の原作に基づいているんです。もっといえば、作者自身が新たに発表しているのですから、むしろ、第7版のものこそがグリム童話の原作と呼ぶにふさわしいのではないかとも思うのです。

そんなわけで、グリム童話が「本当に」残酷であったのかどうか、実際は微妙なところです。初版を原典とするか、輸入された時点でのものを原典とするか。ここが分かれ目のようですね。（真のオリジナルが何かの論争はばかばかしいと思いますが）

調べてみれば白黒はっきりしないようなことって結構あるものです。煮え切らない結論ですが、すっぱり解決できてしまうのも面白くないですし、ここから先の結論はお任せします。ここからは何を原典とするかという価値観の問題ですので。

コン太くんとピョン子ちゃん

子ぎつねのコン太くんはおちびさん。そのうえいじめられっ子の泣き虫さん。

今日もコン太くんはめそめそ泣きながら、森の中のにんじん畑にやってきました。そこにはいつも、うさぎのピョン子ちゃんがいて、コン太くんを優しく慰めてくれるのです。

「うわーん、ピョン子お姉ちゃん。キー助とトン吉にいじめられたよう」

「まあ、またなの。昨日も一昨日もその前も、同じことを言ってたじゃない」

いつもは優しいピョン子ちゃんですが、今日はコン太くんの話を聞くなり怒りはじめました。

「コン太ちゃん、いじめられてばかりいるあなたも悪いのよ。もっと大きく強くなって、いじめられないようにならなくちゃいけないわ」

「でもお姉ちゃん、大きく強くなるにはどうすればいいの」

「えーっと、えーっと。そうだわ、フクロウ先生に聞けば分かるはずよ」

「なるほど、さすがはお姉ちゃんだ」

コン太くんとピョン子ちゃんは、どうぶつの国で一番の物知りの、フクロウ先生のところにやってきました。

「フクロウ先生、フクロウ先生、大きく強くなるにはどうすればいいんですか」

「それはだね、ごはんをたくさん食べることじゃよ。ホッホー」

「わーい、フクロウ先生ありがとう。さっそくお母さんに、今日からたくさんごはんをつくってくれるようにお願いしよう」

その日からコン太くんは、お母さんのつくってくれるごはんを、たくさんたくさん食べるようになりました。するとコン太くんはみるみるうちに、大きく強くなりました。

ところが、そんなある日のこと――。

今日もコン太くんは森の中のにんじん畑にやってきました。ところがそこには、いつもいるはずのピョン子ちゃんがいません。

「おかしいなあ、ピョン子お姉ちゃんがいないだなんて。せっかくキー助をけんかで負かしたこと、ほめてもらおうと思ったのに」

けっきょくその日、コン太くんはピョン子ちゃんに会うことができませんでした。

次の日も、そのまた次の日も――。

次の次のそのまた次の日。にんじん畑でピョン子ちゃんを待っているコン太くんのところに、フクロウ先生がやってきました。

「あっ、フクロウ先生、ピョン子お姉ちゃんがいないんです。どこに行けば会えますか」

「いいかいコン太や、よくお聞き。おまえが大きく強くなったから、ピョン子は安心して、遠いところへ行ってしまったのだよ」

それを聞くなりコン太くんは、大声で泣きだしました。おちびさんでもいじめられっ子でもなくなったけれど、泣き虫だけは治っていなかったのです。

「会いたいよう。ピョン子お姉ちゃんに会いたいよう。うわーん」

けれどもフクロウ先生はなにも言わずに、森の奥へと行ってしまいました。

夜が来て、泣きつかれたコン太くんは、にんじん畑で眠ってしまいました。

（コン太ちゃん、コン太ちゃん）

（泣き虫さんは今日でおしまいになさい）

（だってね。本当の強さというのは、心の強さのことなんだから）

ピョン子ちゃんの夢をみるコン太くんは、最後にひとつぶだけ涙を流しました。

フクロウ先生と、どうぶつの国の大きなお月さまが、そんなコン太くんを見守っていました。

ここでフクロウ先生から問題です。

「うさぎのごはんはにんじん、ではきつねのごはんはなんじゃろう。ホッホー」

。〈ごはんをたべる〉